

あらすじ

昔、貧乏なおじいさんとおばあさんがいておじいさんが山で木をこり、それを売って暮らしていた。

売れ残った木を橋の上から「竜宮の乙姫さまに差し上げましょう」と投げ入れていた。木はぐるぐる回りながら海へ出ていた。

ある日。おじいさんが帰ろうと思ったら、「ちよっと待って」と一人の男が現れ、「自分は竜宮の乙姫さんの使いで来た。竜宮では薪がのうて困っているに、薪を毎日送ってくれて助かっ

1斗8升の米

(八頭郡智頭町波多)



イラスト・福本隆男

打ち手の小槌のどかな話

出る。ただ限度があり三つしか打たれないぞ」と、打ち出の小槌を渡して消えた。

おじいさんは、帰って足」と小槌を打ったら、

「この小槌は何がほし」と言われて「本つじやが、ばあさん、どんまで出てきて困った。」

「この小槌は何がほし」と言われて「本つじやが、ばあさん、どんまで出てきて困った。」

る。乙姫さんが、これをやれ、と言われた」と打

ち出の小槌をくれた。

「この小槌は何がほし」と言われて「本つじやが、ばあさん、どんまで出てきて困った。」

「この小槌は何がほし」と言われて「本つじやが、ばあさん、どんまで出てきて困った。」

「この小槌は何がほし」と言われて「本つじやが、ばあさん、どんまで出てきて困った。」

ら、おばあさんが「食べある。打ち出の小槌とい

る米がねえじゃが」と言

ったので「米、1斗8升。

「2人が食うに困ると、きれいなおばあさん

のりっぱな男に変身する

のであるが、そのような

打ち出の小槌は、昔話の

世界では他の話の中にも

このようにちゃんと用意

されていることがある。

以前、島根県鹿足郡吉

賀町で語っていたのだ

「カタツムリの息子」で

は、カタツムリの息子が、

妻と氏神様へお参りに出

かけ、最後に海から打ち

出の小槌を拾って来て、

家や米を出して金持ちに

なる形で出ていた。

とところで、この智頭町

の話は、関敬吾博士の『日

本昔話大成』を調べても

見つからない珍しいもの

なのである。

「2人が食うに困ると、きれいなおばあさん

のりっぱな男に変身する

のであるが、そのような

打ち出の小槌は、昔話の

世界では他の話の中にも

このようにちゃんと用意

されていることがある。

以前、島根県鹿足郡吉

賀町で語っていたのだ

「カタツムリの息子」で

は、カタツムリの息子が、

妻と氏神様へお参りに出

かけ、最後に海から打ち

出の小槌を拾って来て、

家や米を出して金持ちに

なる形で出ていた。

とところで、この智頭町

の話は、関敬吾博士の『日

本昔話大成』を調べても

見つからない珍しいもの

なのである。

解説

いたってのどかな話で

(元鳥取短期大学教授)
(水曜日に掲載)